



テクニツクの向こう側

先日、ひよんなきっかけから、「人生で最も泣いた日」の話になりました。いわゆる滂沱の涙（ぼうだのなみだ）を流すことは、人生においてそう多くはないでしょう。

私も、これまで数えるぐらいしかありません。

その話を、スポーツフェスティバルの直前にクラスで伝えました。

今か12年前。

場所は、カンボジアの小学校。

私は、日本からの代表使節団の一員として、その学校を訪れました。

最初に通された場所は、広い講堂でした。

すでに、そこにはカンボジアの子どもたちがずらりと並んでいました。

日本から来られたお客様に向けて、どうやら歌と演奏をプレゼントしてくれるようです。

曲目は、「涙そうそう」。

その演奏に使われた鍵盤ハーモニカは、日本から送られた中古品でした。

前奏が始まり、子どもたちが歌い始めました。

瞬間、涙腺の堤防は決壊しました。

堪えることなど到底不可能な涙の出方でした。

同行した方々も、全員が泣いていました。

あとからあとから、涙が出てきます。

どういう感情で自分が泣いているのか、よく分かりませんでした。

感じたことの無い思いが次々溢れてきて、ただひたすら泣きました。

こんな体験は、初めてのことでした。

後から、その時の感情を冷静に整理してみました。

念のため書いておきますが、「不憫に思って」とか「かわいそうだ」と感じて涙を流したわけではありません。

確かに、日本から比べたら経済的には厳しい状況にある子どもたちです。

生活環境も、学習環境も、日本から比べたらずっと質は下がります。

子どもたち全員が、学校に通えるわけではありません。

親を失い、自分たちで生活を営む孤児院の子たちの所にも訪問しました。

大人になっても読み書きができず、夜に裸電球一つの明かりで文字を学ぶ識字教室の様子も現地で見学してきました。

けれども、それらのことを哀れに思って涙したわけでは決してありません。

なぜなら、自分の感情をふり返ってそこに言葉を当てはめた時に浮かんできた言葉が、「憧れ」や「理想」だったからです。

私は、カンボジアの子どもたちを、羨ましいと思ったのでした。

その時の歌。

その時の演奏。

子どもたちは、明らかに、ひたむきに生きていました。

目いっぱい口を開け、腹の底から高らかに声を出し、歌うことを、奏でることを、心の底から楽しんでいました。

生きることを、謳歌していました。

残念ながら、私は日本の学校でそんな姿を一度も見たことがありませんでした。

だから、憧れたのです。

教育の一つの理想を見た思いがしました。

中古の鍵盤ハーモニカはところどころ音程がずれていたし、歌のリズムを違えている部分も沢山ありましたが、そんなことは全く関係ありません。

全員が、一所懸命に歌うこと、ひたむきに生を謳歌することが、これほどの感動を巻き起こすのだということを、私は肌でひしと感じたのでした。

この話を、ダンスの直前にしました。

そして、

ダンスは確かに上手になってきました。

リズムも格段に取れるようになってきています。

しかし、本当の高みは別の所にあります。

最後はテクニックではない。
最後はやっぱり「心」なのです。
ひたむきに、踊ろう。
一所懸命に、生きてみよう。
ダンスは大失敗でも構わない。
何なら全部間違えても大丈夫。
思い切り熱を込めて踊ることができれば、きっとそれが伝わるはずだから。
と、そんな話をしたのでした。



子どもたちの踊りは、みなさんの目にどのように映ったでしょうか？

☆ ↓ 読者ページはこちらから ↓ ☆ ご意見ご感想など気軽にお寄せください

<https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6IFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit>

